

候補者の名前と得票の因果関係

—非合理的要素と自書式投票—

上山 敬之

1 序文

選挙において投票を行う場合、有権者は自分のイデオロギーや政策争点に対する考え方に基づいて合理的もしくは戦略的に投票を行うと一般的にされている。次元上の政策位置を考慮するダウズモデルなどは、政治学の中でも重要なモデルとして位置付けられている。

他方で、有権者は候補者の非合理的な要素に誘導されて投票を行っているという結論づける研究も近年では数多く見られる。例えば区議会選挙においてポスターの顔写真の「若作り度」が得票に影響しているという研究（河野・櫻井 2020）や、衆議院議員選挙でポスターの笑顔度が得票に影響を与えているという研究（Asano and Patterson 2018）がある。視覚的要素以外にも政党党首の声の周波数が政党のイメージ、勝敗に関わっているという研究（岡田 2017）がある。

このような先行研究に鑑みて、本稿では非合理的要素の一つとして候補者の名前の表記が投票に影響を与えている可能性を考える。日本の選挙では、選挙管理委員会に戸籍上の氏名とは異なる名前を届け出ている場合が多い。さらにその名前を選挙ポスターなどにも使用している。例えば「ドクター中松」や「マック赤坂」など明らかに通称名の候補者もいれば、「おくもとゆり」というように自分の名前をひらがなにして選挙管理委員会に届け出ている候補者もいる。「名前」が得票に対して影響を与えないのであれば、名前を通称名やひらがな表記にする必要はないはずである。

日本ではほとんどの選挙において自書式（有権者が候補者の名前を投票用紙に書くということ）を採用していることから、有権者にとって「書きやすさ」ということも投票所で候補者を選択する上で重要な要素になっていると考えられる。本稿では実際に名前が得票

* 社会科学総合学術院 遠藤晶久准教授の指導の下に作成された。

に対してどのような影響を持つのかについて検討し、選挙の方式と有権者の「非合理的選択」の関係について論じる。

2 先行研究

冒頭で述べたように非合理的要素に着目した政治学の文献は多いものの、「名前」に焦点を当てた研究は数少ない。例外として Muraoka (2019) が挙げられる。Muraoka (2019) では衆議院選挙における候補者の名前と得票の因果関係を分析し、1993 年以前の単記非移譲式投票方式（いわゆる中選挙区制）において、「名前の複雑さ」が選挙結果に影響を与えていることを結論づけている。その上で、知名度が低い新人候補者ほど、現職と比較して非合理的要素の影響を受けることを明らかにした。他方、現行の制度である小選挙区においては、名前と得票の因果関係は見られなかった。

Muraoka (2019) によると、中選挙区制下の選挙では、一つの選挙区に同一政党の候補者が複数人立候補することが多く、小選挙区制下の選挙と比較して、党派性が低くなり、結果として「名前」などの非合理的要素が影響を与えるとされている。この考え方に基づけば、現在において候補者の人数が多い地方議会選挙ほど、「非合理的要素」の影響が強い選挙結果を観測しやすくなることが予想できる。

「名前」表記の効果について考える際に、様々な要素があり得るが、Muraoka (2019) では名前の複雑性を「名前の総画数」に限定している。本稿では届出氏名においてカナ文字使用の有無にも着目する。さらに、名前の「表記」ではないが、読み仮名の長短による選挙結果の違いも検討する。また、中選挙区制の選挙において、自民党などではいわゆる「利益誘導政治」が積極的に行われていたこと（斉藤 2010）、国政においては政党の幹部や閣僚経験者など知名度が高い候補者が多いことなどから、非合理的要素以外にも説明要素が多くなることが考えられる。以上のことを考慮して、本研究では党派性及び知名度自体が相対的に低い、地方議会の選挙に着目して検証を行った。

3 仮説

先行研究を踏まえ、以下の仮説を提起する。

仮説 1：「名前が複雑な候補者ほど得票が少なくなる」

仮説 2：「ひらがなを使う候補者ほど得票が多くなる」

仮説 3：「新人候補者ほど仮説 1・2 の関係が強くなる」

仮説 4：「大政党に属する候補者ほど仮説 1・2 の関係が強くなる」

仮説 1・3 は先行研究（Muraoka 2019）から直接導いたものである。仮説 2 は、名前をひ

らがなにすることにより、有権者に対してソフトなイメージを植え付ける戦略があるということを考え導いたものである。仮説4についてはMuraoka (2019)の「党派性の低さ」とは若干矛盾する。しかし、「党派性を持つ有権者」においても、投票の際に非合理的要素が影響するのではないかと考え、仮説4を提起した。例えば自民党の支持者が投票の際に、「自民党であれば誰でも良い」という思考により、「名前が簡単な候補者」を選択するということが考えられるということである。

4 実証

4-1 使用するデータと変数

上記の仮説を検証するために、2019年度の統一地方選挙で行われた東京都の区議会選挙のデータを使用し、分析を行った。

従属変数には各候補者の得票の選挙区内標準化得点を使用した。23区全ての候補者を一括りにして分析する際に、選挙区で候補者数、定数、得票の差が生じるため、それらをコントロールする目的で標準化得点を使用した。数値の求め方は、(得票数－候補者所属の当該区の平均得票) / (その区の標準偏差) とした。

独立変数は、名前の複雑さの指標として、Muraoka (2019) 同様、各候補者の名前の総画数を使用した。その際、戸籍上の氏名ではなく選挙管理委員会に届け出た名前をカウントする。具体的には、「大隈重信」という表記の候補者の場合、「大 = 3、隈 = 12、重 = 9、信 = 9」、とカウントし、総画数の値は33となる。一方で、「福沢ゆきち」のように候補者がカナ文字を使用した場合、「福 = 13、沢 = 7、ゆ = 3、き = 4、ち = 3」、とカウントし、総画数は30となる。

名前の表記については、そのほかにひらがなを使用している場合に1とするダミー変数(例：大隈重信 = 0、福沢ゆきち = 1)と名前の文字数(例：大隈重信 = 4、福沢ゆきち = 5)も作成した。その他に、読み仮名(例：オオクマシゲノブ = 8、フクザワユキチ = 7)も独立変数とした。

コントロール変数には、性別ダミー(男 = 1、女 = 0)、新人ダミー(新人 = 1、非新人 = 0)、政党ダミー(例えば「自民」という変数は、自民党所属の候補者は1、それ以外は0とする)を設定した。さらに、候補者数の差をコントロールするため、選挙区定数と候補者数の対数を取った値($\log(\text{候補者数})$)を全ての分析の際に変数に加えている。また、コントロール変数についてはデータ取得の際に不明であった場合は欠損値として処理している。

上記で述べた変データの収集方法は以下の通り。氏名、性別、前職については選挙データを集めている「選挙ドットコム」のウェブサイトから、データスクレイピングのコード

表1 データの概要

Statistic	N	Mean	St. Dev.	Min	Pct(25)	Pct(75)	Max
年齢	1,046	50.7	11.7	25.0	42.0	59.0	80.0
標準化得票	1,124	0.01	1.3	-4.7	-0.6	0.5	7.1
得票数	1,124	2,580.2	1,615.0	0.0	1,468.5	3,502.0	10,901.0
文字数	1,124	5.2	1.0	3.0	5.0	6.0	9.0
読み仮名	1,124	6.8	1.0	3.0	6.0	7.0	11.0
総画数	1,125	24.5	6.5	9.0	20.0	29.0	50.0
カナ	1,122	0.8	0.4	0.0	1.0	1.0	1.0
性別	1,124	0.7	0.4	0.0	0.0	1.0	1.0
新人	1,124	0.3	0.5	0.0	0.0	1.0	1.0
候補者数	1,124	54.4	10.2	36.0	51.0	58.0	74.0
定数	1,124	39.3	6.6	25.0	34.0	44.0	50.0
自民	1,124	0.3	0.5	0.0	0.0	1.0	1.0
公明	1,124	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0	1.0
立民	1,124	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	1.0
国民	1,124	0.03	0.2	0.0	0.0	0.0	1.0
都民	1,124	0.03	0.2	0.0	0.0	0.0	1.0
維新	1,124	0.02	0.1	0.0	0.0	0.0	1.0
共産	1,124	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	1.0
NHK	1,124	0.02	0.1	0.0	0.0	0.0	1.0
無所属	1,124	0.2	0.4	0.0	0.0	0.0	1.0
他	1,124	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	1.0

を書いて必要なデータを抽出した。また、名前や読み仮名の文字数は Excel のカウント機能で計算し、名前の総画数は、名前の検索サイト（良運命名）を使用して、各候補者の名前を入力して計算した。

データの概要は表1に示した。政党ダミーについて、大規模政党以外の地域の団体などに所属している候補者については「他」として表記した。表1の行について N = データの個数、Mean = 平均、St.Dev. = 標準偏差、Min = 最小値、Pct (25) = 第一四分位数、Pct (75) = 第三四分位数、Max = 最大値である。

4-2 重回帰分析

集計したデータを用いて回帰分析を行った。独立変数を組み合わせた際に、カナ文字の有無と文字数が相反することが考えられるため（名前をひらがな表記にした場合、一般的に文字数は増える）、独立変数が交絡することを防ぐ目的で個別の回帰分析も行った。また、名前以外の要素を統制するために、全ての回帰式について、性別ダミー、新人ダミー、log（候補者数）、定数をコントロール変数とした。仮説1~4を検証するために総画数、文字数、読み仮名、カナ文字ダミーを組み合わせた回帰式、さらに新人ダミー、政党ダミーによって交差項を用いた分析を行った。

表2 全候補者に関する分析

	<i>Dependent variable:</i>				
	標準化得票				
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総画数	-0.011 (0.006)			-0.012* (0.006)	-0.011* (0.006)
文字数		-0.061 (0.041)			-0.113* (0.058)
カナ			0.006 (0.092)	-0.048 (0.096)	0.134 (0.134)
読み仮名	-0.037 (0.039)	-0.033 (0.041)	-0.060 (0.037)	-0.036 (0.039)	0.013 (0.046)
log(候補者数)	3.018*** (0.508)	2.929*** (0.508)	2.962*** (0.512)	2.991*** (0.511)	3.034*** (0.511)
定数	-0.038*** (0.014)	-0.036** (0.014)	-0.037** (0.015)	-0.038** (0.015)	-0.039*** (0.015)
性別	-0.536*** (0.085)	-0.549*** (0.086)	-0.536*** (0.086)	-0.542*** (0.086)	-0.543*** (0.086)
新人	-0.874*** (0.074)	-0.873*** (0.075)	-0.875*** (0.075)	-0.874*** (0.075)	-0.868*** (0.075)
Constant	-9.270*** (1.535)	-8.978*** (1.544)	-9.231*** (1.559)	-9.138*** (1.557)	-9.175*** (1.556)
Observations	1,124	1,124	1,122	1,122	1,122
Adjusted R ²	0.204	0.203	0.202	0.204	0.206
F Statistic	49.068***	48.790***	48.243***	41.990***	37.306***

Note:

 $p < 0.1$; $p < 0.05$; $p < 0.01$

5 分析結果

5-1 仮説1・2に対応した回帰分析の結果

表2より、全ての回帰分析で、10%の有意水準において名前の複雑性が得票に負の影響を与えていることがわかる。同様に、文字数が増えることも選挙結果に対して負の影響があることがわかった。他方で、候補者の新人・非新人の区別、政党の区別をつけない場合、カナ文字の有無は得票に対して正の相関があるものの、統計的に有意性ではなかった。同様に読み仮名についても負の相関が見られるものの統計的な有意性は無いため、現時点では、選挙結果に影響するとは考えにくい。

5-2 仮説3に対応する回帰分析の結果

新人・非新人のダミー変数による交差項を用いた分析を行った(表3)。名前の総画数は新人・非新人を問わず、全ての候補者について「名前が複雑になるほど得票しにくくなる」という結果が見られる。

カナ文字の有無については、新人候補者はカナ文字の影響を受けやすく、「カナ文字を使用するほど得票が多くなる」が、非新人候補者(現職・元職)は名前にカナ文字を使うか否かによる得票の差は見られないという結果になった。表3の(2)を可視化したグラフが下記の図1である(散布図は△が新人、○は非新人)。図1は、X軸がカナ文字ダミ

表3 新人候補者に関する交差項の分析

	<i>Dependent variable:</i>			
	標準化得票			
	(1)	(2)	(3)	(4)
総画数	-0.011 (0.007)			
文字数		-0.173*** (0.049)		
読み仮名			-0.037 (0.046)	
カナ				-0.280** (0.113)
新人	-0.752*** (0.291)	-2.062*** (0.396)	-0.488 (0.490)	-1.554*** (0.170)
log(候補者数)	3.042*** (0.508)	3.052*** (0.507)	2.920*** (0.511)	3.048*** (0.508)
定数	-0.039*** (0.014)	-0.039*** (0.014)	-0.036** (0.015)	-0.040*** (0.014)
性別	-0.561*** (0.081)	-0.579*** (0.080)	-0.534*** (0.086)	-0.574*** (0.081)
総画数：新人	-0.005 (0.011)			
文字数：新人		0.229*** (0.075)		
読み仮名：新人			-0.057 (0.070)	
カナ：新人				0.832*** (0.189)
Constant	-9.574*** (1.508)	-8.966*** (1.527)	-9.257*** (1.537)	-9.593*** (1.517)
Observations	1,124	1,124	1,124	1,122
Adjusted R ²	0.204	0.210	0.202	0.214

Note: $p < 0.1$; $p < 0.05$; $p < 0.01$

ーであり、本来は0または1のみで表記される、可視化するためにコーディングにより散布した。全体的に非新人の得票が多くなるのがわかるが、カナ文字ダミーによって比較した場合、新人候補者は回帰係数0.63で正の相関がある。

5-3 仮説4に対応する分析結果

仮説4について、政党ごとに分析した結果は表4、表5のようになった。表4は総画数に関する分析結果、表5はカナ文字の有無に関する分析結果を示している。所属政党でコントロールしても、総画数に影響を与えている。一方で、政党別の交差項では全ての政党について仮説と同じ方向では統計的に有意な結果は得られなかった。このことより、政党で区分けした場合には、政党によって名前表記の効果が異なるとは言えない。したがって仮説4については支持されなかった。加えて、表4、表5の回帰分析(1)は自民党の交差項であり、統計的に有意であるが、この場合は自民党候補者について、「名前が複雑な候補者ほど得票が増える」、「カナ文字を使わない候補者ほど得票が増える」という、仮説1、仮説2とは逆の説明がされている。

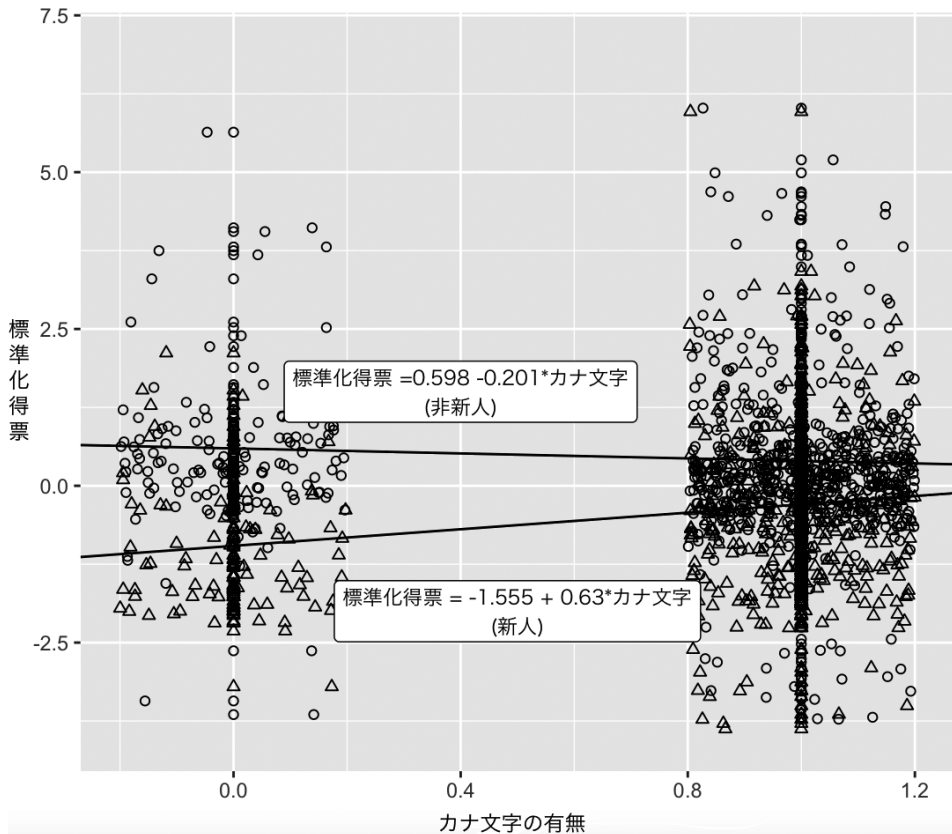


図1 新人か否かとカナ文字が標準化得票に及ぼす影響

6 結論

本稿の分析によって、名前の総画数・文字数が得票に対して負の相関があり、いずれも統計的に有意な関係があることが明らかになった。このことから、一般的に名前が複雑な候補者は得票が少なくなることがわかった。画数が少ない名前であるほど有権者に投票されやすいことが推測される。

候補者全体の分析（表2）では、カナ文字の使用は統計的に有意な影響を与えていなかったものの、新人ダミーを用いた分析では、「新人候補者ほどカナ文字を使って得票を増やすことができる」ということがわかった。全体的にカナ文字を使うことが有権者にソフトなイメージを与えることなどを想定していたが、この分析結果から、そのようなイメージ戦略は新人候補者などに限定された効果しかないことが推測される。現職議員などですでにある程度の知名度を獲得していることもあり、名前にカナ文字を使用することの利得は低いということが考えられる。

表4 政党ダミーと名前の総画数の分析

	<i>Dependent variable:</i>						
	標準化得票						
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
総画数	-0.022*** (0.007)	-0.013** (0.006)	-0.013** (0.006)	-0.014** (0.006)	-0.015** (0.006)	-0.015** (0.006)	-0.014 (0.006)
自民	-0.337 (0.327)						
公明		0.185 (0.433)					
立民			0.980* (0.569)				
国民				0.002 (1.044)			
共産					-0.228 (0.463)		
維新						-0.581 (1.246)	
NHK							0.400 (1.231)
log (候補者数)	2.894*** (0.532)	2.774*** (0.537)	2.663*** (0.530)	2.676*** (0.537)	2.731*** (0.538)	2.732*** (0.537)	2.710*** (0.537)
定数	-0.031** (0.015)	-0.030* (0.015)	-0.027* (0.015)	-0.027* (0.015)	-0.028* (0.015)	-0.028* (0.015)	-0.028* (0.015)
性別	-0.624*** (0.086)	-0.548*** (0.086)	-0.511*** (0.085)	-0.539*** (0.086)	-0.548*** (0.086)	-0.557*** (0.086)	-0.551*** (0.086)
総画数：自民	0.029** (0.013)						
総画数：公明		0.0004 (0.018)					
総画数：立民			-0.006 (0.023)				
総画数：国民				-0.021 (0.041)			
総画数：共産					0.010 (0.018)		
総画数：維新						0.037 (0.050)	
総画数：NHK							-0.023 (0.048)
Constant	-9.381*** (1.582)	-9.150*** (1.599)	-8.886*** (1.574)	-8.832*** (1.596)	-8.975*** (1.600)	-8.980*** (1.596)	-8.932*** (1.597)
Observations	1,124	1,124	1,124	1,124	1,124	1,124	1,124
Adjusted R ²	0.125	0.108	0.130	0.109	0.105	0.106	0.106
F Statistic	27.781***	23.577***	29.063***	23.939***	23.025***	23.267***	23.085***

Note:

 $p < 0.1$; $p < 0.05$; $p < 0.01$

名前の表記と政党ダミーとの交差項を用いた分析では、「大政党ごとで、候補者の名前の影響が生じる」といった仮説に沿った分析結果は見られなかった。自民党に関しては、名前の総画数が多いほど得票が多くなるという結果や、カナ文字を使うことで得票を減らしているなど、仮説とは逆の現象が見られた。この分析により、「党派に基づいて投票を行う有権者にとっては、候補者の名前の特徴は関わりがないこと」や、もしくは自民党候補者は名前を簡素化することやカナ文字を使用することは逆効果になることが考えられる。

表5 政党ダミーとカナ文字ダミーの分析

	<i>Dependent variable:</i>						
	標準化得票						
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
カナ	0.206* (0.107)	0.041 (0.096)	-0.010 (0.093)	0.029 (0.093)	-0.010 (0.100)	0.024 (0.093)	0.011 (0.093)
自民	0.892*** (0.185)						
公明		0.275 (0.386)					
立民			1.208*** (0.450)				
国民				-0.184 (0.538)			
共産					-0.196 (0.230)		
維新						1.089* (0.600)	
NHK							0.517 (0.694)
log (候補者数)	3.186*** (0.508)	2.964*** (0.513)	2.927*** (0.503)	2.929*** (0.511)	2.975*** (0.512)	3.005*** (0.511)	3.020*** (0.512)
定数	-0.042*** (0.014)	-0.036** (0.015)	-0.036** (0.014)	-0.036** (0.015)	-0.037** (0.015)	-0.038*** (0.015)	-0.038*** (0.015)
性別	-0.624*** (0.083)	-0.579*** (0.082)	-0.542*** (0.081)	-0.561*** (0.082)	-0.589*** (0.082)	-0.587*** (0.082)	-0.584*** (0.082)
新人	-0.836*** (0.075)	-0.894*** (0.077)	-0.894*** (0.074)	-0.887*** (0.075)	-0.889*** (0.075)	-0.890*** (0.075)	-0.901*** (0.076)
カナ：自民	-0.760*** (0.203)						
カナ：公明		-0.376 (0.401)					
カナ：立民			-0.329 (0.473)				
カナ：国民				-0.569 (0.592)			
カナ：共産					0.107 (0.261)		
カナ：維新						-0.608 (0.681)	
カナ：NHK							-0.129 (0.748)
Constant	-10.511*** (1.521)	-9.637*** (1.531)	-9.555*** (1.501)	-9.503*** (1.526)	-9.610*** (1.533)	-9.745*** (1.528)	-9.788*** (1.529)
Observations	1,122	1,122	1,122	1,122	1,122	1,122	1,122
Adjusted R ²	0.217	0.200	0.229	0.206	0.200	0.203	0.201
F Statistic	45.357***	41.087***	48.674***	42.539***	41.059***	41.839***	41.263***

Note:

 $p < 0.1$; $p < 0.05$; $p < 0.01$

本稿では選挙結果と候補者の名前を比較した実証分析を行ったため、具体的に有権者の投票行動について観測することはできなかった。投票行動のモデルの一つであるミシガンモデルでは有権者の投票が長期的には政党帰属意識に基づき、短期的には候補者のイメージが影響しているとされている。「候補者の名前」は政党帰属意識が強い人には選択する際に考慮する要素として影響をもたらさないが、無党派の人を含めて政党への帰属意識が低い人には「候補者の名前」も短期的（選挙当日など極短時間）に強い影響を与えている

と推測できる。今後の展開としては、有権者の党派性で分類してどのような投票行動が行われているのか（その場合に候補者の「名前」という要素が関わっているのか）を観測できる研究に発展させたいと考える。

注目すべき分析結果として、「読み仮名」の長さが得票に影響を与えないという点が挙げられる。街頭での選挙運動の際に行われる名前の連呼などについても「名前の複雑性」が関わると考え、選挙運動を通じて影響を与えているならば、読み仮名の長さや得票の関係が統計的に有意であると予想した。しかし読み仮名は得票に影響がないという結果から選挙運動を通じて優劣があるとは考えにくいことがわかった。

名前の総画数やカナ文字の影響は、投票所で名前を書く際生じていると考えられる。このことから、「名前」が投票に影響を与える一因は自書式にあると考える。特に地方議会の選挙は候補者も多数おり、多くの有権者にとって「誰がどのような人物か」を正確に答えることは難しい。この場合において選挙に影響をもたらすものが非合理的要素である。しかし、本来の選挙の主旨から考えて、より多くの有権者が政党帰属意識や政策争点に沿って合理的に投票を行うことが望ましい。

したがって、可能な限り有権者の判断材料となるような非合理的要素を排除する必要性がある。有権者自ら候補者の名前を書くよりも、マークシート方式を採用する方が良いだろう。マークシートでの投票であれば、有権者の記入間違いを防ぐ他、選挙管理委員会の集計の際も判読に時間をかける必要性もなくなり、無効票などが減る可能性も考えられる。

さらに、現在の公職選挙法では候補者の名前の表記に関する制限は、芸名を含む通名については、日常的に使用していることを証明する義務があるが、表記に関して漢字やひらがなを使用する場合に厳しい制限はない。そのため候補者が自分の名前の表記を変えて出馬することは容易である。戸籍上の名前自体にも個体差があり、選挙結果に優劣をもたらす可能性は否定することはできないが、「名前を変えたために得票が増えた」という現象を減らすためにも選挙管理委員会に届け出る名前には何らかの規制を設定する必要があると考える。

引用文献

- 飯田健・松林哲也・大村華子（2015）『政治行動論—有権者は政治を変えられるのか』、有斐閣。
 伊藤光利・田中愛治・真淵勝（2000）『政治過程論』、有斐閣。
 岡田陽介（2017）党首の「声」と党首評価・政党評価・投票選択—党首討論会の音声周波数解析と JES IV 調査データによる実証分析。『2016 年度参加者公募型二次分析研究会 現代日本人の政治意識と投票行動に関するデータの二次分析研究成果報告書』5-23。
 河野勝・櫻井美里（2020）「選挙ポスターの『若作り』で、政治家はどれほど得をするのか？—公選法の規制対象外で『修正し放題』の選挙写真」WEBRONZA (<https://webronza.asahi.com/politics/articles/2020033000002.html>, アクセス 2020/12/14)

- 齊藤淳 (2010) 『自民党長期政権の政治経済学—利益誘導政治の自己矛盾』, 勁草書房.
- 選挙ドットコムホームページ『地方選挙』 <https://go2senkyo.com/local> (アクセス 2020/12/14)
- Asano M. and D. P. Patterson (2018) “Smiles, turnout, candidates, and the wining of district seats.” *Politics and The Life Science* 37: 16–31.
- Muraoka, T. (2019) “The electoral implications of politically irrelevant cues under demanding electoral systems.” *Political Science Research and Methods*, 1–15.

謝辞

本研究及び論文執筆に際し、遠藤晶久先生には長期間にわたりご指導いただきました。また、データフレーム作成にあたり東北大学の遠藤勇哉様にお世話になったほか、ゼミ生との議論によりアドバイスを御得て研究を行うことができました。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

